山形放送

活動名	YBC アナウンサーによる読み聞かせ“お話の国”
実施期間	令和 5 年 10 月～令和 5 年 12 月
実施回数	会場 3 回

【事業実施の成果・課題】

コロナによる制限がなくなり、対面での読み聞かせが自由にできるようになりました。児童との感想交流、質疑応答などの時間を取れるようになり、読み聞かせが立体的になったと思います。目の前にいる子どもたちの正直な反応は、普段の放送では得られないものです。その分、間の取り方、声色など、私たちアナウンサーの学びになっていると思います。
今後はさらに多くのアナウンサーが活動に参加できるように工夫するのが課題です。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

＜中川悠アナウンサー＞
今回は小説の読み聞かせだったことから、視覚的情報がない子どもたちに分かりやすく伝えるためには、読み手の表現の工夫が重要であることを実感しました。20 分超えの内容を「最後まで飽きを感じさせない」そして「理解してもらう」さらには「筆者の意図も考察してもらう」ことは、想像以上に難しかったです。
読み聞かせ後、子どもたちの考えをお互いに話す時間を設けたことで、より作品への理解も得られたように感じ、私自身も充実感がありました。一方的な読み聞かせで終わらず、このような簡単な交流があれば、お互いに満足度も上がるのではないかと思います。
＜松下香織アナウンサー＞
西山形小学校での「注文の多い料理店」の読み聞かせでは、話が進んでいくにつれ、児童たちの表情がどんどん変わっていくのがわかりました。
視覚に影響されることなく、頭の中で物語の世界を想像していくという、本の楽しさを実感してもらえたのではないかと思います。
山形盲学校では、これまでと同じく読み聞かせへの集中力が高く、こちらも一音一音に気を配って読みました。
＜小坂憲央アナウンサー＞
本を読み始めると場の雰囲気が変わるのを感じました。十二支の始まりについて知っているという児童が多かったのですが、笑い声や身振り手振りの反応から、しっかりと耳を傾けて聞いてくれていることが伝わりました。
会の終了後に、1 人の児童が「アナウンサーになるにはどうすればいいですか?」と質問に来てくれたのが嬉しかったです。

＜青山友紀アナウンサー＞
はじめ笑っていた子どもたちが、話がシリアスになっていくにつれ無言になり引き込まれていくのがわかった。小さな本の絵を食い入るように見つめる真剣さに、こちらも程よい緊張感をおぼえた。
同じ空気の振動の中にいる心地よさ、放送では味わえない感覚だった。
＜陣内倫洋アナウンサー＞
子どもたちに絵本を読み聞かせをするという事がこれまであまりなかったので個人的に大変貴重な機会となりました。一人一人の目を見ながら話しかけるようにかみ砕いて読む事を意識しました。
反省は子どもたちの素直な反応につい話が脱線しがちになり、時間がオーバーぎみになった事。
子どもたちに楽しんでもらえればとお邪魔しましたが、逆に元気をもらいました。楽しかったです。

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

＜山形県立盲学校教諭＞
テレビやラジオで聞いている声が目の前に生であるという感覚、子どもたちにも良かったと思います。
＜山形県立盲学校児童＞
・大切なことがたくさんあった。本の内容にあったように、思いやりを大切にしたい。
・十二支の話では、12 番目の動物が無事に到着できてよかったと思った。
＜山形市立西山形小学校「注文の多い料理店」感想交流から＞
・人の言うことをそのまま信じてはいけないという教訓だと思った。
・自分たちで読むのと、アナウンサーが読んでくれるのとでは聞こえ方が違った。
・声がきれいだった。
・本の中に入ったような気持ちになった。